
天国から地獄へ

春崎やよい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天国から地獄へ

【Nコード】

N9892D

【作者名】

春崎やよい

【あらすじ】

前回の話の最後の話から、未来に飛ばされたコナンは、森に来た。そこで、三つの棺おけを見た。それが、歩美・元太・光彦のものだった。なぜ、コナンは、そこに現れたのだろうか？それが今、明らかになる。未来から過去時空を超える！ほぼオールキャラ！最後に服部が新一に告白を！！苦手な人は、やめておいたほうがいいかもしれません

キャンプしようよ！

あれから、十年が経った。

今、コナンたちは、ある組織と対決していた。けれど、それが果てしなく、長く続いていたのだ。

コナンたちが中学に上がってすぐのこと。

最初、ジンが阿笠邸を嗅ぎつけた。それが今日こんにち

その日は、歩美・元太・光彦・コナンが阿笠邸に遊びに来ていた。

コナンは、日に日に新一に似てきた。

そんな日、歩美の決定的な言葉が上がった。

「ねえ、今度みんなで、キャンプしに行かない？」

歩美の提案がこの戦いの始まりだったのだ。

「いいですね。行きましょう！」

「そうじゃな。」

光彦と博士も賛成した。

(子供たちとあと、何回いけるか、分からものじゃ)

博士の顔は、寂しいって言っていた。

時間が経ち、外が暗くなってきた。歩美・元太・光彦は、変える支度を始めた。

「じゃ、私たちかえるね！」

「気をつけて帰るんじゃぞ！」

家の前に出て、歩美・元太・光彦を送った。

コナンは、みんなを見送り、そして帰ることにした。

暫く通りを歩いていると、珍しい車を見つけた。コナンは、それに気がついた。

(あれは、ポルシェ！ジンの愛車)

まさかとは、思うがな。

コナンは、知らんぷりして、通り過ぎることにした。車に乗ってい

る人を見た。

(ジン！)

コナンの心臓が鼓動を早くなっていた。

組織との戦いは、すぐそこまで来ていた！

みんなでキャンプへ

コナンは、家に帰ると蘭に早速、キャンプのことを話した。
すると

「行つていいかな？」

「いいわよ。それとね。私からもお願いがあるんだけどいいかな？」
「なあに？」

蘭がコナンにお願いしたいこととは、一体なんだろうか？

コナンは、首をかしげた。

「あのね、私も言つてもいいかな？」

蘭も一緒に行きたいと言つてきた。

「別にかまわないけど」

「良かったあ。ものは、相談なんだけど。服部君たちも呼んでもいいかな？和葉ちゃんと快斗くん、青子ちゃんも」

蘭の願いは、友達を呼びたかつたらしい。でも、なぜ快斗と青子もなのだろう？

コナンは、疑問に思ったが聞かないことにした。

快斗と青子と知り合ったのは、有希子が快斗の父親と知り合いだったためであった。青子と知り合ったのは、二課の中森警部の娘だということを知ったからである。一度会つてみたところ、蘭がいうので、あった見たら、なんと新一と蘭にとても似ているので、意気投合してしまつたからであった。そうして、友達となつた。

そうなると、コナン一人だけで、決めることは、出来なかつた。

「蘭姉ちゃん。僕一人だけじゃ、判らないよ。みんなと相談しないと」

「そつだよね。ごめんね。」

蘭は、すまなさそうな顔をして見せた。

「明日聞いてみるよ」

「ありがとう」

コナンがそういうと、蘭は笑顔を見せた。そして、夕飯を作るため、台所に行った。

「ポーと立っていると、小五郎がコナンに声をかけてきた。」

「コナン、話がある。」

小五郎から話があるなんて、初めて聞く台詞だった。

コナンは、小五郎のそばに行つて話を聞いた。

「俺もそのキャンプに言つてもいいか？目暮警部たちも呼びたいんだが・・・」

「“たち”？目暮警部のほかにも呼ぶつて事？誰呼ぶの？」

「佐藤刑事、高木刑事、白鳥刑事、千葉刑事だ。」

コナンは、ポカンとしていた。

何で、こんなにたくさんなの？と言いたげだった。

「コナン聞いているのか？」

小五郎が訝しげな顔で見えたので、コナンは考える頭を振り払い、「聞いているよ」と笑顔で答えた。小五郎のそばから離れると、二階に行った。

小五郎は、小声で「変なやつ」と言った。そして、同時に

「探偵坊主と似てきたな」とも、言った。

夕飯食べた後、お風呂に入り、就寝した。

次の日、蘭は、朝ごはんを作つて、コナンと途中まで一緒に登校した。

コナンは、歩美・元太・光彦・灰原を見つけると、すぐに駆けつけた。

「おはよう」

「「「おはよう（ございます）」」」

三人は、コナンに元気よく挨拶をした。

歩美・元太・光彦は、先を歩き、灰原とコナンは、ゆっくりと後を

歩く。

コナンは、昨日のことを灰原に話していた。

「昨日、ジンを見た。」

「なんですって!」

灰原は、酷く驚いているようだ。

「見たと言つても、ちらつとだがな。」

「そう。気をつけなさいよ」

灰原は、平常を保ちながら、コナンに言った。

このまま、何事もないまま、いいのだが・・・哀は、そうあることを願った。

帝丹中学校に着いた。

学校に着くと、コナンは、昨日蘭・小五郎に頼まれたことをみんなに話した。

「・・・と言うわけなんだが。いいか?」

「いいですよ!むしろ、大歓迎です!大勢で、キャンプなんて、楽しいじゃないですか!」

光彦がいい、

「うん!歩美も賛成!」

歩美も賛成した。これで、決まった。

灰原にこのことを博士に伝えとおくことになった。

放課後になり、蘭たちがいるのを確認した。

「蘭姉ちゃん、小父さんにいう事があるんだ。キャンプ、みんなで行こうね!」

「ありがとう、コナン君!」

「そうか、良かった！」

二人は、大喜びした。

コナンは小五郎にどうしても聞きたいことがあった。どうして、キヤンプに行くことになったのだろうか。それを小五郎に聞いてみると

「ねえ、聞いていいかな？みんなを誘う理由って、何？」

「たまには、私たちも入れて欲しいなって、思ったんだ。それにね、和葉ちゃん、服部君、青子ちゃん、快斗くんも誘いたいなって、思ったんだ。」

蘭は、簡潔に分かりやすく言った。後から、小五郎から聞いた「俺も蘭と同じ理由だ。どうせなら、警部たちも一緒だと、安心だしな」

(そういうことね。)

コナンは、納得した。

そのあと、蘭は、みんなに確認の電話をした。

小五郎は、直々に警視庁に行つて、伝えに行った。

結果、その日は、外食となった。

ただ、その会話が全て盗聴されているとは、知らずに

土曜日なら

土曜日、当日。

この日は、みんなでキャンプに行く

阿笠邸にコナン・歩美・光彦・元太・灰原・博士・蘭・小五郎・服部・和葉・快斗・青子・目暮警部・佐藤刑事・高木刑事・白鳥刑事・千葉刑事が集まった。

みんながいるか点呼を取り、小五郎が借りてきたレンタカーのワゴン車に全員乗った。

「それにしても、子供たちがいるなんて、聞いてないわ！俺は、くどくど・・・やのて、コナン君に遭えると思たかた、きたんやで！」

服部は、むすつとした表情になった。

「もともとは、少年探偵団の子達が行くのに参加したただけなんだから。ごめんね。服部君」

蘭が服部に言った。

ちよつと、無責任だったかなと蘭は、思った。

「まあ、そうやな。」

服部は、「その通りや」と頷いた。

コナンは、哀と一緒に助手席に座っていた。

「それにしても。なんで、コナンが哀ちゃんと一緒に助手席に座っているんや？」

「そうね。子供二人が助手席に座るなんて・・・。危ないのモいところだわ」

服部と佐藤刑事が言う。

助手席に座るコナンが言う。

「しょうがないよ。座るところが殆どないんだから
もつとも意見である。」

「誰が何処に座ろうと関係ないんだよ！」
小五郎が言う。無責任な言葉である。
けれど、コナンが隣にいることがすごく嬉しかったりするのだ。

キャンプ場に着き、それぞれ役割分担をして、分かれて行動するこ
とになった。

子供たちと博士は、薪を集め、蘭たちは、料理を作ることに
刑事たちは、ゆっくりと過ごしている。

薪を集め終わって、子供たちが戻ってきたようだ。

「蘭姉ちゃん！薪持って来たよ。」

コナンが言った。

コナンの後ろには、哀・歩美・元太・光彦と並んで、歩いていて、
その後ろには、博士が歩いていていた。

「うわあ。たくさんあるね。暗くなっても安心ね」

それを聞いて、蘭が感嘆の言葉を上げた。

料理の支度が整って、ご飯が出来た。

「出来たよ！」

此処まで、着て食べるものといったら、カレーだ。

みんなで、食べるとあつという間に鍋の中は、空っぽになった。

ご飯も食べ終わって、ゆっくりしていたそのとき。森の中から、誰
かが近づいてくる気配にコナンが気づいた。コナンだけじゃなく、
服部、快斗、目暮警部、佐藤刑事もだ。

「くくく。見つけたぞ！シエリー。さあ、私たちと一緒に来い！」

ジンだ。隣には、ウオッカ・ベルモットがいた。

哀は、行くわけがない。

「行く気なんてないわ！あそこには、戻りたくない！」

哀が言った。

事態が飲み込めていない、蘭・小五郎・歩美・元太・光彦・目暮・佐藤・千葉・高木・白鳥は、哀を見ていた。

コナンは、哀の前にいて、護っていた。腕時計型麻醉銃で、ジンのことを狙っていた。

もちろん、快斗、服部、博士は、このことは、知っていたから、哀・コナンを護ることは、容易にできる。

「さつき、お前たちが食べたカレーには、解毒剤を入れておいた。それを食べれば、判ることだよな？シエリー……いや、宮野志保

！お前の前にいるやつは、工藤新一だな。」

それを聞いたとき、みんなは、コナンと哀を見た。

コナン君が新一！

蘭だけじゃなく、その場にいるみんなが思ったことだった。

高校生が子供になるわけがない。そんな夢物語みたいなことでも、実際に此処にいるのだ。

コナンと哀の体に変化が生じていた。

心臓が早く脈打ち、息が荒くなってきた。

「うあああああ！！！！」

ドクン！！

体が見る見るうちに大きくなっていく。

こんなところ、見られたくない。

けれど、体が大きくなっていく。服が裂け、元の姿に戻った。

「新一！！」

「哀くん！！」

博士と蘭が二人に寄り添った。

「見られ……ちまったな……悪かったな………今まで……だましてきて……」

新一が蘭に言った。

「新一がコナン君だったなんて……」

「こんな形で、ばれるとは、思っても見なかったぜ！服部、服貸し

てくれねえか？持ってきているだろう？」

新一は、服部に言った。

「持っているで！待っているや！」

服部は、そういい、キャンプの中に入っていき、荷物から下着と服を出した。外に出て着て、中で着替えるように言った。新一は、服部に差さえらるように中に入っていき、服を着た。

新一が出てくると、今度は、志保のばんだ！

「私の服かしてあげる！来て」

蘭は、志保と一緒に中に入って行き、服を出した。蘭の服を着た志保が外に出てきた。

志保が蘭の服をきていて、プロポーションがよくて、着こなしていた。モデルのように見えた。

その場にいた誰もが声をあげた。

「おー！」

「哀お姉さん、かつこいいい！」

歩美が言った。

志保は、それに気がついて、「ありがとう」と言った。

「私の名前は、宮野志保。十八歳よ」

その場にいた人たちは、驚きの声をあげた。

志保は、立ち上がりジンをキッと睨みつけた。

「私、戻る気はないから」

「此処にいるやつらを殺すまでだ！」

「この人たちは、関係ないわ！この人たちに手出さないで！」

志保は、言った。

「お前が来れば、手を出さない。」

志保は、目を閉じて、「わかったわ」と言い、ジンの許に行った。こうすることで、みんなが助かるならと思った。

「宮野！」新一は、叫んだ。

「工藤君、今までありがとう。そして、……さようなら」

志保の言葉を聞いたのが、最後だった。

新一は、志保を抱きしめて、言った。

「宮野、お前のことが好きだ。だから、何処にも行くな！」

新一の懇願だった。

でも、志保にとっては、邪魔なものでしかない。自分は、幸せになつてはいけないと

「何言っているの。蘭さんは、ずっとあなたのことを待ち続けていたのよ。だから、私のことは、忘れなさい」

志保は、新一の腕の中から出て、ジンの許に歩み寄った。

ジン・ウォツカ・ベルモットが先を歩き、そのあとを志保がついていった。

新一は、その場で膝を付き、「くそおお！」と叫んだ。

どうして、宮野は、いつもそうなんだよ。自分で決め付けて、殻に閉じこもつて

言いたいことは、たくさんあった。

新一は、立ち上がり、志保が消えたほうに向かって、走り出した。

「工藤！」

服部が新一の後を追って、走っていった。

新一に追いつくことは、出来なかった。

森の中は、ごちゃごちゃしていて、真つ暗で何も見えなかった。

「もしかして、見失つてもうたんか？」

あたりは、木々ばかり。見失つても可笑しくない状況。服部は、来た道に戻ることにした。

これ以上、闇雲に突つ走つても、迷子になるのが落ちだと思つたらだ。

森を抜け、川原に出た。テントを張つてあるところに着た。みんながいた。

服部に気がついた蘭は、新一が何処に言ったのか聞いた。

「すまん。後を追つたのは、いいんが、見失つてもうて」

「そつだよね。」

蘭は、悲しそうな顔をしていた。

久しぶりに会ったのにどこかに行ってしまった。もう、遭えないの？
そんな思いが蘭の心の中で交差していた。
それから、新一が戻ってきたのは、次の日の明け方だったことは、
言うまでもない。

さよなら（後書き）

志保と新一が許の姿に戻る事が出来ました。

遅くなってしまい申し訳ありません。昨日は、ちょっと出かけていたもので。

では、ちょっと此処でこの話のエピソードを！

この話は、今までより永く書いてある事が重要なんです！

お気づきになった方もいたと思いますが、これは、新一・志保の思いが重なり合っています。（此処、非常に重要！

ですので、此処から先は、死人が出てくる可能性があります。そういうのが、お嫌いな方は、やめておいたほうがいいです。

今回は、ジン・ウオッカ・ベルモットを登場させてみました。まあ、最終的には、ジンしかしゃべっていませんでしたが……。大目に見てください。

長くなつてしまい失礼しました。

次回も読んでくださいね！

知られざる秘密

新一がテントに戻ってきたのは、明け方だった。

（結局、宮野を見つけられなかった。何やっているんだよ?! 自分が情けねえ。）

テント前に新一がいることに服部が気づいた。

「どうしたんや? 工藤」

服部がテントの中から出てきた。

「服部・・・、俺何もできなかった。」

新一の顔は、後悔した顔だった。そんな顔を見て、服部が元気付けようとした。

「大丈夫や。姉ちゃんは、帰ってくる。」

新一は、服部を見た。服部の顔は、笑っていた。自信に満ち溢れていた。

新一も自然と笑っていた。

「そうだな。宮野が帰ってくるのを待てばいいよな」

新一は、元気を取り戻した。

新一は、このときから服部を意識するようになっていた。

みんなが起きてきたのは、六時ごろ。それまで、新一と服部は、話をしていた。

今まで、あった出来事を

そのときの新一の顔は、生き生きしていた。

（ほんまにあの姉ちゃんのことが好きなんやな）

服部は、新一が話す志保のことを聞いて、思った。その時から新一

のことを気になり始めた。

「そろそろ、みんな起きてくる頃や」

服部は、座っていた石から立ち上がった。

それが合図のようにみんながテントの中から出てきた。みんなは、新一を見て、近くに来た。

「志保さんは？」

蘭だ。志保があの後どうなったのかが気がかりだった。

「ダメだった。見失っちゃった。」

新一は、笑って答えてくれた。さっきまでの新一じゃなかった。でも、どこか頼りに見えた。

これからどうするの？と蘭が続けて聞いてきた。

「もちろん、探す。でも、闇雲に探しても無駄だ。快斗、頼みたいことがある。やつらの本拠地が何処にあるか、探してくれないか？」

新一は、快斗に向けて言った。

「任せておけ！俺の手に掛ければ、一目瞭然だぜ！」

快斗は、胸の前で親指を立てていた。

すぐに森のほうに行き、キッドの格好になった。上空から探すのだからと、新一は、思った。

持つべきものは、友達だ。けれど、青子は、快斗のもう一つの顔を知らなかった。

「新一君！私たちは、何をすればいい？」

目暮警部が言った。目がきらきらと輝いていた。

「相手は、巨大組織です。戦うとき協力してくれば、いいです。」

新一は、警部たちにそう伝え、携帯を出した。そして、ある番号に電話を掛けた。

「ＨＩ、ジヨディです。」

「ジヨディ先生。お話があります。今から言うところにきてください」

どうやら、ジヨディに電話を掛けたらしい。もちろん、声はコナンで。

組織は、FBIを追っている。だから、新一は、FBIであるジョディ先生に電話をした。

「新一、今のつて・・・」

蘭だ。電話で話していた相手を聴こうと思った。

「FBIに電話を掛けた。あの組織は、FBIが追っていたんだ。俺と宮野は、それに関与してしまっている。」

新一は、義務なんだよと付け足した。

蘭は、新一に危ないことをして欲しくないと思っている。

「新一、約束して。帰ってくるって」

「帰ってくる。宮野を連れて」

新一は、蘭に笑いかけた。

「うん！待っているからね」

蘭も新一に笑い返した。

朝ご飯を食べて、ゆっくりしているとFBIが来た。

「コナン君！着たわよ」

ジョディが先頭に立って、歩いてきた。その後ろからは、ジェームズと赤井秀一がいた。

新一は、声のしたほうを見た。

「ジョディ先生お待ちしていました」

新一は、立ち上がった言った。

「君は、工藤新一くん！？どうして此处に？コナン君に呼ばれてきたのよ？」

ジョディが言った。

「実は、江戸川コナンは、俺なんです。」

「坊主は、頭が切れる。なるほどな。」

秀一は、納得していた。まるで、最初から知っていたかのように

「さすが赤井さんだね。」

新一は、蝶ネクタイ型変声器で、コナンの声にあわせていった。

「新一！まさか、それって……」

蘭が訝しげに聞いてきた。人差し指を新一が持っているものに向かっていた。

「ああ、これか。これは、博士が俺のために作ってくれたメカだよ！これで、おっちゃんの声を真似て、俺が推理してきたんだ」

「じゃあ、コナン君がいつもいかなかったのって、そのためだったんだ」

蘭は、びっくり眼で新一を見ていた。

「じゃあ、俺がいつも眠くなっていたのって……」

小五郎が立ち上がって言った。

新一は、ポケットから時計型麻醉銃を出した。

「そ！俺がこれで、おっちゃんを眠らせて、いたってわけ！たまに園子も寝ていたのも、俺が眠らせていたせいさ！」

新一がさらっと言った。

周りの人たちは、呆然としてみていた。

服部は、このことは知っていた。

「とにかく、これから話すことを聞いてください」

新一は、話し始めた。

昨日、ジンが現れて、俺と志保が元の姿に戻ったこと。志保は、組織の一員だったこと

「そんなことがあったのかね。私たちも全力を挙げて捜査する！」
ジェイムズが言った。

組織との戦いが幕を開けたのだった。

知られざる秘密（後書き）

新一が戻り、FBIも登場！

次回から組織との戦いが始まります！

評価のほうお願いします！

変なところとか、ありましたら、お書きください！

救出?!志保

その日、新一たちは、お昼に米花町に帰って来た。

これから、組織との対決がある。そのためには、FBIの協力が必要。

新一・服部・探・快斗・ジヨディ・ジェームズ・赤井秀一は、博士の家に来た。

蘭たちは、FBIの護衛が付けられていた。いつ組織が襲ってくるのかわからないからだ。

「第一に、宮野志保さんを救出すること。組織を壊滅させるのは、二の次。我々、FBIは、援護に回る」

ジェームズが適確な指示を出した。

新一たちは、頷いた。

組織は、思いのほか早く動き出した。

蘭のところにも一本の電話が来た。

「工藤新一に変われ」

低い声の男から電話が来た。

その日は、たまたま新一が探偵事務所に来ていた。

「変わりました」

新一が電話に出ると、男は、早口で捲くし立てた。

「今日、午後二時千代田区の降板に來い。第二倉庫に宮野志保がいる」

そう言っつて、電話は、一方的に切れた。新一も電話を置いた。動き出したな。待っているよ、宮野。

新一は、このときをずっと待っていた。疼いてきた。

「新一!」

蘭が不安な顔をしていた

「大丈夫だ。二時まで、二時間。行つて来る」

新一は、素晴らしい探偵事務所を出た。向かう場所は、千代田区待っているよ・・志保

新一の中では、志保は大きな存在になっていたのだ。蘭よりも大事・

倉庫の中に入り、志保が縛られていることが判った。

新一は、駆け寄り志保の縄を解いた。

倉庫には、センサーが働いている。

新一は、そのことを知らずにはいつてきたため、センサーが働いてしまった。

倉庫に灯油がぶちまけられていた。辺り一面には炎の海と化していた後から来た警察が消防車に電話をした。

「宮野此処から出るぞ！」

「あなただけ、逃げなさい。」

「何言っているんだよ！明美さんだつて、宮野には、生きて欲しいと思つていたはずだ」

志保は、明美と聞いて、「そうね」と頷いた。

新一は、志保の手を取り、倉庫から脱出した。

倉庫を出たところに目暮・佐藤・高木・白鳥・千葉がいた。

「志保さん、大丈夫ですか？」

高木が駆け寄ってきた。

「ええ、平気よ。工藤君、私の服に発信機と盗聴器が着いているの。取ってくれる？」

志保の服を調べると、襟に盗聴器と発信機がついているのを見つけた。

新一は、それを取り除いた。

「取ったぞ」

これで、組織に付けられることは、ない
でも、この志保は、ニセモノなのだ。本物は、まだやつらの手にあ
ったのだ。

新一は、志保を連れて博士のところへ連れて行った。

救出?!志保(後書き)

短いですが、評価のほう宜しくお願いします。

絆（前書き）

ベルモットに注目！

絆

ニセモノの志保と気づかないで、新一は、博士の家にニセ志保を連れてきた。

「博士！」

リビングのドアをバンと開けて、新一が入ってきた。その後ろには、志保・目暮たちがいた。

「志保君！新一、ありがとう」

博士は、志保を助けてくれて、ありがとうと泣いていた。

「博士、心配させてごめんなさい。もう、何処にも行かないから志保に化けているベルモットが言った。」

「（なぜ、そんなにしてまでも、私を助け出したの？）」「ベルモットは、疑問に思うばかりだった。」

本物の志保は、ジンと話していた。

「私を殺さないの？」

志保は、ジンを見据えていった。

「先に工藤新一たちを殺し、そしてお前を殺す」

ジンは、そういった。

（なんて、卑怯なやつ！）

志保は、目の前にいるジンが信じられなかった。こうまでしても、新一を殺したいのかと、問われるほどに。ジンは、志保から離れ、部屋から出て行った。

志保は、ジンに手足を縛られていた。あの晩の日からずっと。さっきの電話は、ジンがしたものだった。

此処は、公園。

助け出されたベルモットは、新一と一緒に歩美たちと一緒に遊んでいた。

新一は、子供たちにサッカーをして遊んでいた。元の姿に戻っても同じらしい。そこが新一のいいところかもしれないが。

「元太君のところに行きましたよ」

「任せておけ！」

光彦が元太に叫んだ。そして、元太は、ヘディングをした。ヘディングしたサッカーボールは、新一のところに来た。新一は、胸で受け止め光彦にパスを出した。

たまたま通りかかった蘭たちがそれを見ていた。

「新一ー！」

蘭が新一を呼んだ。新一は、顔を蘭がいる方に向けた。

「蘭！和葉ちゃん、服部。一緒にサッカーやらないか？」

新一は、蘭たちを発見するなり誘った。

「うん、やる！」

蘭は、いい公園に入ってきた。そのあとを服部・和葉と続いて入ってきた。蘭たちを交えて、サッカーボールを回し始めた。ベルモットは、それを見て楽しくなっていた。

「（私もこの子達のように遊びたいわね。）私も入ってもいいかしら？」

「やろうよ！志保お姉さん」

「そうですよ。一緒にやりましょう」

歩美・光彦が言った。でも、みんなは、こいつがベルモットだという事に気がついていなかった。新一ですらも・・・

ベルモットがみんなの輪の中に入って行った。

「（組織から抜きたい）」

そうしたら、戦うこともないんだし

ベルモットは、そんなことを考え出した。

夕方になり、歩美・元太・光彦は、帰っていった。ベルモットは、新一・蘭・服部・和葉と一緒に博士の家に帰って来た。

「じゃあな、志保！」

「ええ、さようなら。工藤君」

ベルモットは、そついい家に入って行った。

家の中に入って博士に「ただいま」といい、志保の部屋に直行した。志保の部屋には、以前少年探偵団の中まで撮った写真が置かれていた。

それを見たベルモットは、真実をしゃべることにした。

それが組織を裏切ることになるのは、判っていた。

ベルモットは、覚悟を決めた。

喻え、ジンに殺されてもいいと。それがベルモットが出した答えだったのだから

絆（後書き）

ベルモットの心理、ようやく此処までたどり着けた。
半分着ました。

キャンプから始まって、組織との戦い。

まあ、最終的には、バッドエンドよりは、ハッピーエンドで終わらせてしまえたら、いいなと思っています。

評価のほうお願いします。

また、言いたいことなどがありませんでしたら、そちらのほうもお書きください！宜しくお願いしますね！

本部突入！？

ベルモットは、朝起きてすぐに工藤邸に向かった。

現在工藤邸には、服部・和葉がいる。電話で蘭・小五郎・警視庁・FBIに工藤邸にくるようにと伝えた。

十時に全員が工藤邸に集まった。

「みんなに言わなくちゃいけないことがあるわ。志保は、まだ組織の幹部にいるわ」

ベルモットが表情を変えないで告げた。でも、簡単にはいかない

「何言っているんだ？此処にいるじゃないか」

新一が冷静に言う

「工藤新一、何も分かっていないのね。私は、宮野志保に化けたベルモットよ」

ベルモットは、そう言って、マスクを剥がした。

「！？」

その場にいたみんなは、凍りついた。

「宮野は、何処にいるんだ？！」

新一は、険しい顔でベルモットに迫った。

「組織の幹部にいるわ。でも、安心して頂戴。私は、あなたたちの見方よ。」

それを聞いた新一は、眉間にしわを寄せた。

「それは・・・」

「組織のやり方は、酷いわ。組織を裏切った私を殺そうとするでしょうね。」

ベルモットは、今ある状態を話した。

「ベルモット、ためえ何を考えている？」

「何も考えていないわ。ただ、私は、組織を裏切っただけよ」

ベルモットは、繰り返し返した。

「私は、組織が何処にあるのか知っているわ。案内するわ」

ベルモットは、工藤邸を出た。

新一は、ベルモットの後をついていった。

「新一！」

蘭が心配という顔で新一を見ていた

「大丈夫だ。ベルモットが言っていることは、本当だ。着いていこう」

新一の顔は、探偵そのものの顔に変わっていた。そして、笑っていた。

蘭も新一を信じることにした。

博士の家に来ようとしていた探偵団たちを新一は、見た。

「あ、新一お兄さん！」

工藤邸を通りかかった歩美が新一に気がついた

「志保姉さんは？何処にいるの？」

「まだ、見つかっていなんだ。でも、大丈夫。絶対、助けてみるからよ！」

新一は、笑顔を見せた。

「うん！お兄さんのこと信じて待ってる！」

「歩美ちゃん！行きますよ」

数メートルはなれたところで光彦が言った。

「今行くー！」

歩美は、元太・光彦のところに向かっていった。

「行くわよ」

ベルモットが新一に言った。

「ああ」

新一は、ベルモットの後についていった。
本拠地に突入だ！

本部突入！？（後書き）

やっと、此処まで来た。次回は、本部に飛びます。
読まれた方は、評価をしてください。
そののほづを宜しく願います

幕開け（前書き）

志保だと思っていたのは、ベルモットだった。

本部に志保がいるとベルモットがいう。そのことを聞いた新一は、

ある行動に・・・

本編をどうぞ！

「研究室にいると思うわ。ジンは、あそこに閉じ込めていたわ」
ベルモットは、視線で志保がいる扉を見つめていた。歩き出した。
新一もそのあとを追う

宮野・・・待っている・・・今、助けてやるからな！

ベルモットが研究室の扉を開けた。

新一を先に入れ、自分も入った。

相変わらず、志保は、パソコンに向いていた。

「宮野。」

志保は、扉のあるほうに振り向いた。扉の前には、新一とベルモットがいた。

「工藤君！どうして此处に？」

志保が言った。

不思議に思うのは、当然だろう。けれど、後ろにいるベルモットを見れば、気がついた。

そういうことね。

「ベルモット。工藤君を此处に連れてきたんでしょ？いいの？」

志保は、ベルモットに言った。

「かまわないわ。もう、飽きたもの」

ベルモットは、素晴らしいポケットからタバコとライターを取り出して、タバコに火をつけた。

「助けてくれるの？」

志保がベルモットに聞いた。

「そのつもり。早く此处から抜け出さないと、ジンたちが来ちゃうわよ」

ベルモットは、タバコをふかしながら言った。

でも、その顔は、寂しい顔をしていた。

「ベルモット、あなたも一緒に来る？」

志保は、聞いた。

「そうね。出来ればそうしたいわ。」

ベルモットは、嬉しそうな顔をした。

ジンたちがこの部屋に入ってきた。

「工藤新一！此処で、お前を殺してやる！」

ジンは、新一に向かって発砲して来た。

新一は、楽々と弾を避けた。

扉の向こうには、蘭がいた。ジンの頭に蘭の後ろ蹴りが炸裂した。

それは、見事にジンに入った。

ジンは、倒れて気絶していた。

でも、どうして此処に蘭が……？

「蘭……どうして此処に？」

新一は、聞いた。

「新一の後ろを追ってきたのよ。」

蘭の後ろには、服部・和葉・快斗・目暮警部がいた。

新一は、今思い出した。

ベルモットが工藤邸に来た。そこに蘭たちも呼んだ。

「そうか。ジンが起きちゃう前に此処から出ようぜ！」

新一は、志保の手をとり、志保は、ベルモットの手をとった。

「あなたも来るのよ」

そのときのベルモットの顔は、嬉しそうな顔をしていた。

本部から出て、暫くすると自爆スイッチが入った。

きつと、ジンだ。

これで、終わった。

明日から平和な日が来る。

幕開け（後書き）

本部に来た！そして、蘭の後ろ蹴りがジンの頭に入った。

ハーマイオニーのパンチがマルフォイに入ったときと同じぐらいすつきりしました！

あれを見たときは、すごく嬉しかった。

マルフォイは、悪役だし、お似合い役だろうと思いました。

さてと、その話は、置いていて……今回は、どうでしたでしょうか？

私としては、お気に入りの場面です。

ジンファンの皆さんごめんなさいね。

そして、やっと組織と戦いが終わりました。

今回は、蘭と新一の学校生活に戻ります！

いろいろと感想やら、評価やらなんでもいいので、書いてください。
ご参考までに！

転入生

組織と戦いが終わり、いつもと変わらない学校生活が戻ってきた。

新一は、蘭たちと一緒に帝丹高校に登校した。

久しぶりの学校だな。

教室に来たとたん、クラスメイトに冷やかされた。

表も向きはそうでも、内心志保のことで、考えていた。

|||||

「えー、今日から新しく入る生徒を紹介する」

教室の扉が開かれた。

新一は、ほおづえを付いていた。

転校生ね

どんな子とか、興味が無いような顔をしていた。

「宮野志保です。」

「クリス・ヴィンヤードです。」

転校生は、志保とベルモットだった。

「なんだってえええええ！」

新一は、二人から聞かされていなかった。

この学校に転入してくるなんて、どんだけだよ……

「新一どうかした？」

蘭が聞いてきた。

でも、新一の耳には、届いていなかった。

「工藤、どうかしたのか？」

担任も聞いてきた。

「宮野！ベルモット！なんで、お前らが此処にいるんだよ？しかも、転入生って……」

新一は、二人に指を刺しながら、言った。

「その指やめてくれないかしら？」

志保が適確なことを示した。

新一は、刺している指を引っ込めた。

「説明しろ！」

新一は、再度説いた。

「説明って言われても。博士が勝手にしたことだし」

志保が言った。

「博士のすることなんて、たかが知れているな。」

新一は、冷静を取り戻し、いつものポーカーフェイスになった。

「先生、進めてください」

クリスが言った。

「あ、はい。ありがとうございます」

担任は、ベルモットが座る席と志保が座る席を指示して、ホームルームが終わった。

ホームルームが終わると、クラスメイトが新一のところに来た。

「工藤、あの二人とどんな関係なわけ？」

「何でもねえよ。さあてと。屋上にでも行きますか」

新一は、伸びをして立ち上がった。

「工藤君、あなた授業をサボる気？」

志保が言った。

「そうだけど？」

新一は、けろりと答えた。

志保は、何も言わなかった。

もう、繋がりもないことだし勝手にやるわ。 そんなことを考えていた。

楽しい学校生活が始まって最初の一日は、平和でいいものだった。

でも、その平和を壊そうとするやつらが現れるのだった。

転入生（後書き）

やっと普通の生活に戻ることが出来ました。

それにしても、志保とベルモットが帝丹高校に転入してくるとは。

私的には、これから面白いことが掛けそうな気がして、ワクワクが止りませんが・・・（笑）

でも、なぜ博士は、ベルモットも帝丹に送り込んだのでしょうか？

今回は、新しい敵を登場させます。

感想・評価、改善点などがある人は、書いてください。

a n e m y

新一は、屋上に上がる階段を上がった。

屋上に来た新一は、ポリタンクの所によじ登って、あがってきた。

新一は、そこにねころがった。

「ふああ」

欠伸をし、目を閉じた。

||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||

新一が起きたときには、お昼だった。

「ぐーう」

新一のお腹の虫が早く食わせると啼いていた。

「飯にすつか！」

新一は、そこから降りて、階段を下っていった。

教室に来ると、蘭たちが今からお弁当を食べるところに出くわした。

「新一ー！一緒に食べよう」

蘭は、教室前にいる新一に気がついた。お昼一緒に食べようと誘ってきた。

新一は、教室に入り、鞆の中からお弁当箱を取り出して、蘭たちのところに行った。

蘭・園子と食べるかと思っていた新一は、志保とベルモットがいることに気がついた。

「お前らもいたのか」

新一は、ちょっとびっくりしたような口調で言った。

「いるわ。蘭さんに一緒に食べましょうって、誘われたの。」

志保が言った。

そういうことか。

新一は、納得した。椅子を持ってきて座った。

新一が来たことで、お弁当を食べ始めた。

|||||

〃
〃

午後の授業も終わり、新一たちは、帰路に着いた。

「蘭、また明日ね」

「バイバイ」

「今日は、楽しかったわ」

「…また、明日ね…」

上から、園子、蘭、ベルモット、志保が言った。

新一と志保・ベルモットは、同じ方向なので、一緒に帰って来た。

今、ベルモットは、阿笠邸に身を潜めている。

博士が歓迎で迎えてくれたのだ。

工藤邸と阿笠邸の前に来た。

「じゃあな、志保、ベルモット」

「…また明日」

新一は、工藤邸に入っていき、志保たちも阿笠邸に入っで行った。

a n e m y (後書き)

最後に少し敵を登場させて見ました。

あの時、死んだと思っていたジンは、生きていました。壊滅したんですが、ジンだけ生き残っていました。

そして、キャメルと呼ばれた男は、一体何者なのか？これから解き明かされていくでしょう。

さて、今回は、どうでしたでしょうか？

感想・評価・ダメだし等・・・

要望などありましたら、お書きください。

次回も読んでくださいね！

園子から発せられた言葉だ。

新一は、訝しげな顔をした。

「いや、見てねえけど。蘭、まだ着てないのか？」

「そうなの。蘭の携帯に電話しても、繋がらないし・・・」

園子の顔は、今にも泣き出しそうな顔をしていた。

流石の新一も心配になってきた。

蘭、何しているんだ？

新一は、蘭を探すべく教室から飛び出した。

「新一君、何処に行くの?!」

園子が聞いてきた。

「蘭を探しに行くんだよ！此処でじっとしていられるか」

新一は、駆け出した。

学校をで、毛利探偵事務所に向かった。蘭は、まだいるのだろうか
と思ったからだ。

探偵事務所に行く階段を駆け上がり、勢いよくバンと扉を開けた。

小五郎は、デスクの椅子に座っていて、今入ってきた新一を見ていた。

「どうした？」

「蘭がまだ学校に来ていないから、まだ、いるかと思って」

小五郎は、訝しげな顔をしていた。

「蘭なら、とつくに学校に向かったが……」

何?!

新一は、驚愕した。

だったら、学校に来ているはず。まさかと思うが、攫われた!?

新一は、頭を掻いていた。

くそっ!おっちゃんじゃ、頼りにならねえ

苛立ちが増した。

蘭、一体何処にいるんだ?!

誘拐（後書き）

蘭が誘拐されてしまった！一体誰に？

今回の話は、どうでしたでしょうか？新一が動くのは、当たり前すぎで、面白くないと言う方は、いらっしやると思いますが。まあ、此処からは、蘭新でなりたちます。

まあ、今回は、平次たちが出てきます。

また、評価・感想・ダメだし等・・・

ある方は、お書きになってくださいね。

今日もう一回、更新するかもしれませんので、また一度、読んでくださいね！

大阪から来た男

新一は毛利探偵事務所に来た。

蘭がまだ学校に来ていないこと

でも、小五郎は学校に行く蘭を見たということ

それは、まさしく蘭は誘拐されたことを示していた。

「新一、蘭は学校に来ていないんだな？」

「はい、そうです」

新一と小五郎は、向かい合わせのソファに座って話していた。

小五郎は軽くうなだれていた。

「蘭・・・」

小五郎は、最愛の娘蘭を心配していた。

何処に行ったんだよ？蘭・・・

ブブブ　ブブブ

新一の携帯が振動していた。

新一は、ポケットから出して携帯に出た。

誰だよ、こんなときに

新一は、半ばやけになってでた。

『やっと、出てくれ寄った』

電話の相手は、服部平次だった。携帯を何回も鳴らしていたのに新一がなかなか出てくれなくて困っていたらしい。

「なんだよ、忙しいときに」

新一が少し切れ気味に言った

『なんや？なんか事件に巻き込まれたんか？』

呑気な口調で聞いてきた。

なんでいつも、こいつはこうなんだ？

新一は、首をかしげた。服部の行動に時々威かされることがある

「で、用件は何だ？」

手短に済ませてくれよと、思っていた矢先・

『つれないやつぢやな〜。』

いいから、本題に入れよ！

突っ込みたくなるのを必死に堪えた。

『実はな、さつき蘭ちゃんが誰かに連れて行かれるところを見たんや。まあ、一応助けて、一緒にいるんやけど』

服部はさらりと事を告げた。その事を聞いて新一は・・

「なにー！ー！ー！ー！ー！ー！服部、今何処にいる?!」

新一は、あまりの驚きに大声を出してしまった。

小五郎は、新一を見ていた。

『そんなに大声だすことないやんけ』

電話の向こうで服部が耳からケータイを話していた。

「すまん！つい・・」

新一は服部に謝った。

「それで、今何処に・・」

新一が服部に今何処にいるのか聞いた。

『杯戸町におる。はいどデパートの前や。迎えにきてーな』

「ああ、今から行く」

新一は、電話を切りポケットに入れた。そして、今の話を小五郎に

服部は、新一にお礼を言われて、ほんのり顔が赤くなっていた。

「で、何しに来たんだ？」

新一は、服部に詰め寄った。

こういふときの工藤って、どうしてこう、怖いんやろ

服部は、顔を引き攣らせていた。

「わかったから、怖い顔すんなや」

新一は、顔を元に戻した。

「遊びにきたんや」

「一人でか？」

「そうや！東京来的时候、和葉とワンセットみたいないいかたせん
といてや」

「いつも、一緒にいるから」

新一は、さらりと言った。

服部は、ため息ついた。

「まあ、ええか。和葉を連れてきたっかたんやけど、この前、喧嘩
してしもつてん」

ああ、そういうことか

新一は、服部が和葉を連れてくるはずだったことがわかった。

それにしても、喧嘩。あいかわらずだな

新一は、笑ってしまった。

「フフッ」

「工藤、どうしたんや？」

服部は、急に笑い出した新一を見た。

「なんでもねえよ」

新一は、蘭のところに行った。

「蘭、学校に行くか？」

「ううん、今日は、いい」

「そうだな」

新一は、蘭に学校に行くか、聞いた。

学校を休むことにした新一と蘭は、小五郎と一緒に事務所に戻ることにした。

服部は、三人の後をついていった。

あ、そうだ。

新一は、服部に向き直った。

「服部、聞きてえことがあるんだけどよ。蘭を誘拐したやつって、誰だったんだ？」

「片手に無線機を持っていて、背が高く、がたいのいい兄ちゃんやったで。そういえば、その兄ちゃん。無線機の相手と話しておった。確か、ジンって、言っとたつで。それ以外の言葉は、何も聞こえなかつたわ」

新一は、ジンと言葉を聴いて、驚いたような顔になった。

あいつ生きていたのか！

新たな幕は、気って落とされたのだった。

大阪から来た男（後書き）

服部登場！！新一が突っ込むところ、たくさんかけました。いや、新一は、突っ込み役だなと改めて思いました。こうしないと新一が成り立たないと

今回の話は、どうでしたでしょうか？

私的には、いいところを選び取り見取りといったところですね。評価・ダメだし等・お書きになってくださいね。

復活

新一はジンが生きていることを知った。

蘭を誘拐しようとしたのは、一体どうしてなのか？

新一は、腕組みをしながら考えた。顔は険しくなるばかり。

とりあえず、ジンが生きていることをジヨディ先生に伝えよう

新一は、ポケットから携帯を出して掛けた。

『Hi ジョディです』

少し明るめの声でジョディが電話に出た。

「工藤です。ジンは生きています。」

新一は、簡単に言った。

『なんですって！あの時壊滅したんじゃないの?!』

「僕も今までそう思っていました。ジンには、手下がいることがわかりました。そいつが今日、蘭を誘拐しようとしたんです。蘭は、服部に助けてもらったようです。」

『そう。気をつけて。一応、護衛をつけるわ』

そついい一方的にジョディから電話が切れた。

蘭が台所から出てきた。

「お父さん、ここに置いておくね」

蘭は、デスクにコップを置いた。新一・服部に渡し、ソファに座った。

一口飲み、一息ついた。

その場が和やかになった。緊張から解けたそんな感じの空気が流れていた。

「ねえ、新一。組織は、壊滅したんだよね？」

「そのつもりだった。でも、ジンはまだいたんだ。やつを捕まえなくちゃ意味がねえ」

新一の目は険しかった。

これから起きることには、注意をしなくてはいけないといっているようだった。

新一の殺気を感じ取っていた。

絶対アイツを逃しておくわけにはいかねえ。

復活（後書き）

ジヨデイ先生、再び出ました。

更新遅れてしまいすいませんでした。ちょっと、スランプ気味だったもので・・・

今回の話、まとめるのに時間が掛かりました。思案していても、なかなか浮かばなかったんですね。でも、今日考えていて、閃いたのが、ジヨデイ先生！

ジンが生きていることをFBIに知らせないと思い、こづいという結果に・・・

評価・感想・ダメだし等がありましたら、お書きになってください。
何事も、素直に

それでは、またお会いしましょう！

事務所の前まで来ると、新一は蘭と一緒に探偵事務所に入ってきた。「ただいま」

蘭が入り、新一が入った。

デスク前では、テレビを食い入るように見ている小五郎がいた。

小五郎は、顔を上げ「お帰り」というと、テレビに視線を戻した。

蘭は、二階に行き、着替えをした。

新一は、ソファにドカッと座り、寝転がった。まだ寝たりないのかと言うくらいすぐに寝いてしまった。

蘭が戻ってきた。ソファの上で寝ている新一を見た。

目を細めて、笑った。また寝ているのね。

蘭は、台所に行き夕飯の支度を始めた。

昨夜。新一は、警察に事の子を伝えておくべきなのか考えていた。けれど、証拠をつかまないと警察は動いてくれない。それに今、FBIがいるから大丈夫と思っていた。そうしてひとつの結論に達した。

自力で片をつけると

出会い

組織が壊滅して、ジン一人だけになった。

「工藤新一・・・覚えていろ・・・」

蘭がジン目掛けて、後ろ蹴りをしてきたとき蘭の気配に気がついていたのだ。

でも、それをもろに食らって伸びてしまった。

ジンが目覚めたときには、建物は崩壊していて組織の連中は、警察に連れて行かれていった後だった。警察は、ジンは死んでいるだろうと思えば探さなかった。

何時間も経って、夜の町を歩いていたジンは、新しい手下を探していたのだ。

無線機を持った男がアレックスだったのだ。この男にジンは、助けられた

彼は、日本に留学していた大学生

ジンは、彼の家でお世話になることになった。

「此処が俺の家だ。」

アレックスは、ジンを家に連れてきた。

ジンは、中に入りまわりを見た。生活をするものはある。部屋には、

机・布団・勉強道具しかない。さっぱりしていた。

アレックスは、ジンが着るための服を出していた。

「お風呂に入って、これを着て」

アレックスに手渡しで、服を渡された。

それを素直に受け取り、ジンは風呂場に向かった。

服を脱ぎ、帽子を取って、風呂に入った。

素直すぎて、可愛い。

シャワーのノベルを回して、頭からシャワーを浴びた。頭を洗い、体を洗った。

ジンの体は、程よく筋肉がついていて、長い脚・腕は、とても綺麗

「判った。」

アレックスは、承諾してした

「今日そいつの家に行ってみてきてくれ」

ジンは、無線機をアレックスに持たせた。

何かわかったら、連絡をしてこいということは、頭のいいアレックスにすぐに判った

アレックスは家を出、工藤新一の家に向かった。

ジンから渡された紙を片手にして、向かった

それは、ジンが考えた計画のうちだった

まずは、アレックスに監視をさせ、そのあと、工藤新一を誘拐しても、アレックスは間違えて、違うやつを誘拐してしまうが・

朝、アレックスが探偵事務所前を通ったときに蘭を誘拐した

「お嬢さん、一緒に来て」

蘭は、何がなんだかわからない様子で、連れて行かれた

アレックスは、自分の家に連れて行こうとしたのだ。

蘭は、疑問を抱いていた。

（なんなの？この人誰？）

わけが判らないという顔をして、首をかしげた

蘭たちが通りかかったところを服部が助けてくれた

「自分何しているのか、わかつているんやろうな？」

服部は、木刀を両手でしっかりと握っている

アレックスは、それを見ただけでビビッてしまい、ジンに連絡を取った

「ジン、木刀を持った男が目の前にいるんだけど・・・」

「とにかく、逃げるんだ！」

アレックスは、蘭を放して、一目散に逃げ去った

(何やアイツ?)

服部は、蘭を保護し、新一に電話をした

数分してやっと、新一と繋がりに着てくれるように頼んだ

出会い（後書き）

今回は、ジンを中心に書いて見ました
そして、男の正体は、町であつた男だったので。
今もジンは、その男の家にあります。
どうでしたか？ダメだし・評価・感想等・
なんでもいいので、書いてくださいね

逮捕されて・・・

此処は、ある探偵事務所

探偵事務所には、目暮警部・高木刑事・佐藤刑事がいた。

今日は、新一の話を聞きに着ていた。

「で？話というのは？」

目暮警部が詮索してきた。

「もう少し待って下さい」

新一は、探偵事務所にある時計を見た

もうすぐで、十二時になる

五分前になり、ある人物が探偵事務所の扉をノックした。

「はい、今出ます」

蘭が扉を開けた。

開けた扉の向こうには、ジョディスターリング捜査官と赤井秀一・ジエイムズがいた。

そう、新一は、先日連絡したFBIを呼んでいたのだ。

「メンバーも揃ったので、お話ししましょう。ジョディ先生は、知っていますよね？ジンは生きていることを」

「何だつて?!あの時の爆発で死んだんじゃないのか?!」

目暮警部が声をあげて、新一に聞いた。

「いいえ、生きていますよ。いつこの間のことです。蘭が一人の男に誘拐されそうになったんです。その男は、無線機を持っていました、服部が聞いたんです。その男がジンと呼んだのを」

目暮警部は、服部に視線を移した。

「本当かね？服部君」

「間違いあらへん。姉ちゃんだつて、聞いてるんやろ？」

服部は、蘭を見た。目暮も蘭を見た

「はい、聞きました。」

二人が証言しているのだから、間違いはないと目暮は、判断した

「そうか。ジンは、生きているのか」

高木は、目暮にこれからどうするのか、聞いてみた

「目暮警部、これからどうします？」

「検問を張る。米花町から逃げ出すかもしれん」

「判りました」

佐藤・高木刑事は、頷いた。

目暮警部・高木刑事・佐藤刑事は、探偵事務所を出て行った。

FBIもそのあとを追うようにして、出て行った。

「俺も帰る。服部、途中まで送っていくよ」

「いや、まだこっちにいるつもりや。工藤、泊めてくれへんか？」

服部は、顔の前にお願いやと手を掲げた。

新一は、どうしたものかと困ったような顔をした。

「分かった。」

新一は、渋った顔をしていた。

「ほな！さいなら〜」

服部、新一は、探偵事務所を出て工藤邸に向かった。

工藤邸に向かう途中、ジンに遭うことになるとは分からないで

「ジン…」

新一が漏らした言葉を聴いて、服部も見た。

新一の前には、ジンの姿があった

「何しに来た・・・？」

新一は、真剣な顔をしていた。それを見たジンは、クスリと笑った。

「お前に会いに来た・・・じゃダメか？」

ジンが笑ったままの顔で新一に言った

「俺に会いに来た？」

「そうだ。死に顔をな」

新一の顔は、険しい顔になった。ジンは、容赦なく新一に銃を向け、撃った

急に銃が撃たれたので新一は、逃げる事が出来なかった。服部は、

このままじゃ工藤が危ないと思い、新一を庇い自分が銃を受けた。服部の腹部からは、血が流れていた。

「服部……!!」

ジンは、そこから立ち下がろうとしたとき、周りを警察に囲まれていた。

「逮捕する!!」

目暮警部の手錠にジンが拘束された。

高木は、服部のところに駆け寄ってきた。

「服部君大丈夫？今、病院に連れて行くから」

高木が服部の左腕を自分の右肩にまわし、車まで連れて行った。

後部座席に座らせ、新一も高木の車に乗り込み、病院に向かった。

新一は、さつきから疑問に思っていたことを高木に聞いた。

「高木刑事、どうして刑事たちがいたんですか？」

「目暮警部だよ。ジンは、工藤君に恨みを持っているだろうからってことになって、工藤君を護衛していたんだよ」

新一は、そうなんだと納得した。

ベイカ病院に着き、服部を車から出した。

幸い、弾は浅いところにとどまっていたため、摘出した。暫く安静にしていれば、治るだろうといわれた。

「よかつたな、服部」

「せやな」

服部は、新一に顔を向けていた。その顔が嬉しく見えた。

「それと……、助けてくれてありがとうな」

「どういたしまして」

新一は、また明日来るからといい、病室を後にした。

逮捕されて・・・(後書き)

更新遅れてしまいごめんなさい

いや、最近ハマった小説がありました、そちらのほうを読んでいまして・・・

ようやく更新できました。(まあ、ちょこちょこ書いていたんですが・・・)

そんなこんなの春崎やよいです。ご迷惑をおかけしまして、すいませんでした

ジン本人が登場し、新一を撃ちました。まあ、最終的には、新一を助けた服部が撃たれてしまいました・・・
大目に見てください。新一思いの服部にしました。

今回、どうでしたか？楽しく読めた方、へんだと思う方、評価のほうを宜しく願います。

また、此処変だなというかたは、お書きください。出来る限り、直します。

さてさて、次回で最終話にさせていただきます。組織の最後の一人が捕まってしまったので・・・

それと、新一^{コナン}たちの未来を変えることが出来てよかったです。歩美たちが死ぬことをさせたくなかったので・・・

我が儘な作者でごめんなさい。

それでは、次ぎ合えることを楽しみにして・・・待っています。評価のほう宜しく願いますね。

交差する想い

昨日、工藤邸に帰るときジンに殺されそうになった新一。でも、服部が助けてくれたので、新一は、傷ひとつなかった。だけど、服部が腹部に銃弾を受けてしまい、手術で弾丸を取り出してもらった。ジンは、服部を撃つてしまい、警察に連行されていた。

新一は、服部にのを見舞いにきた。

「どうだ？具合は」

「よくなってきたわ。ありがとうな、くど……いや、新一」
服部に下の名前で呼ばれ、新一の顔は、一気に赤くかわった。ぜったい、こいつ遊んでやがる！退院したら、投げ飛ばす！

新一は、心のなかで決意した。
病室の扉が開かれた。

「服部君、怪我のほうはどう？」

高木・佐藤・目暮が入ってきた。

昨日、あんなことがあった後だから、気になってきてしまった。

「全然平気や」

「ほう、そうか」

目暮は、ホツとした顔を見せた。佐藤刑事・高木刑事も

「あの後、心配だったのよ。でも、元気何よりだわ」

佐藤は、微笑んでいた。

そのあとから、蘭・小五郎たちが入ってきた

みんなそれぞれ、服部に言葉を掛けた

一週間後に服部は、無事退院できた。

東京駅まで、蘭たちに送られて服部はきた。

「新一、話があるんや」

服部は、新一の手をとり、連れて行った。

人がとにかく少ないところまで着て、話すこと 一体なんだろう

「お前のことが好きや」

服部から聴いた言葉は、それが最後

服部は、自分の唇を新一のそれに重ねた。

何が起こったのかは、新一はわからないと言っような顔を最後までしていた。

服部が新幹線に乗り込み、出発した。

なんなんだよ、

いきなり告白してきて、キスして

逃げていくように大阪に帰りやがって

俺の気持ちも知りもしないで

心の中で、そんなことを繰り返していた

もう、会わないみたいなの言いやがって

服部、俺もお前のことが好きだったよ！！

交差する想い（後書き）

前回のので、最終回と思いいの方がいると思いますが、違います。今回ので、最終話とさせていただきます。

長らくお待たせしました。

最後は、服部が新一に想いを伝えるシーンとなりました。

その後の二人は、どうなったんでしょうか？

そこは、読者の皆様に想像をお任せします

天国から地獄は、これで完結となったわけですが、次の作品を紹介する前にこれからのプランを読者の皆様にお伝えしておきます。

これからは、定期的に更新するつもりです。

バラバラに投稿したりとかするときがあると思いますが

小説を書いていくわけですが、私としては、コナンだけじゃなく、ドラえもんズの小説も書きたいなと思っています。最近、はまりまくりで！！

だから、今まで投稿しなかったのは、ドラえもんズの世界を読んでいたわけですが・・・

まあ、更新と読むほうも努力していきますので・・・
長くなってしまうました。

評価などがありましたら、お書きください。

その他も受けていますので、遠慮なくお書きください。

此処が気に入ったと言う方もいましたら、書いてください。

次回の作品投稿は、暫く掛かります。了承お願いします！

それでは、またどこかで・・・

おまけ

新幹線に乗って、服部が帰っていった。

あの後、何日か考えた末、新一は蘭に大阪に行くことを話した。

そして、もう蘭のところには、帰ってこないことも

これからは、服部と一緒にいるためだ。蘭には、幸せな家庭を築いて欲しいから

俺が蘭を幸せに出来ないことも、待たせるのは、いやだから

外国にいる両親に新一は、大阪に行くことを伝えた。

『新ちゃんがそうしたいなら、そうしなさい。』

「母さんありがとう」

電話を切り、すぐにでも、大阪に行く準備を始めた

工藤邸の鍵は、博士に預け、一人大阪に行った

もちろん、服部に電話をしないで

驚かせたかったのだ

大阪に到着した

新一は、前服部に教えてもらった住所を頼りにして、タクシーで近くまで行った

服部邸の前に来て、呼び鈴を鳴らした

中から、服部本人が出てきた

「新一……一体どないしたんや？荷物もって」

「服部のそばにいたいからだ」

まっすぐな目を服部に向けていた

服部は、見開いていた目を嬉しそうな目に変えた

「良かったわ。上がりい」

服部は、新一を中にあげた

「お邪魔します」

新一を自分の部屋に案内した。

これから、一緒にいることや、いろいろなことを話し合った。そして、すぐにでも、一緒に住めるところを探そうという事になった。

今は、まだこのことを服部の両親に伝えていないけど、いつかは、二人だけの家を持って、一緒に過ごせるときがあるといいな

新一は、そんな思いを抱きながら、考えていた

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9892d/>

天国から地獄へ

2010年10月9日07時40分発行